

「ふつくちや」の話

高田 友

現代中國語の漢字の發音は、悉皆「母音または-n または-ŋ」にて終はる。「他 ta, 利 li, 都 dou, 爰 ai, 山 shan, 通 tong」ふくくるが如し。

然而、隋唐音（漢字の日本に入り來たる頃の中國にての發音）には、m, p, t, k を以て終はる音の存せしなり。本稿にては、p, t, k にて終はる音を論ぜんとす。

現代中國語には「聲調（四聲）」と稱するアクセントあり。「第一聲（平たきアクセント）」「第二聲（上り調子）」「第三聲（一上り下り後上る）」「第四聲（下り調子）」なり。

一方、我儕は、若き日に漢文を教はりしをり、「平上去入」なる用語を習ひたり。古代中國語のアクセントにて、漢詩を作る際の重要なポイントなり。

すなはち「平聲」「上聲」「去聲」「入聲」の四つを曰ふ。

「平上去入」は、現代の聲調にほぼ對應す。「平」は一聲と二聲に對應し、「上」は三聲、「去」は四聲なり。「平」のうち、一聲と同じ平板なるアクセントを「陽平」二聲と同じ上り調子を「陰平」と呼ぶ。すなはち、「陽平」「陰平」「上聲」「去聲」そのまま「一聲」「二聲」「三聲」「四聲」なり。

但、「對應す」とは申せぬか、同じ漢字の、往昔「上聲」なりしかばして、如今「第三聲」になりたるには非ず。時代と地域の異同に據りて、各漢字のアクセントもまた異同あり。

扱て、對應關係にて觸れざりし「入聲」とは何ぞや。これぞ、p, t, k にて終はる音の謂ひなる。何を以てか、「入聲」のみは、アクセントに非ずして、發音を表すに至りたりけん。

隋唐音の p, t, k にて終はるは、みなその前の母音は短母音なり。英語を以ていふならば、cap, sit, dock 桃の如き發音になり、sheep, boat, cake の如く、p, t, k の直前に長母音・二重母音の現はるゝなかりき。

たとくば、「甲 KAP」「質 SIT」「皿 MOK」を見よ。「短母音 + p, t, k」にて終はる。（現代中國語にてはそれぞれ、jia, shi, mu）。

「本稿に於ては隋唐音は大文字アルファベットにて表記し、日本語のローマ字表記、發音表記、現代中國音などは小文字アルファベットを以て表す」

略解すれば、短母音に p, t, k なる強き發音（これを「破裂音」と言ふ）の子音の後續するに據りて、アクセントの生ぜずと言ふべし。英語にてむ cap, sit, dock などは、辭書を檢策せんとも、アクセント記號を附するなし。アクセントなき單語といふも可、あるいは、單音節語にして、一箇所にのみ母音の存する場合には、アクセント記號を附するの要なし。

中國語（隋唐音）にても、「アクセントなき」を「入聲」に分類したりと申すべし。

日本語の《音読み》を以て勘案すれば、「入聲」には、「𠂔」「𠂎」「𠂔」「𠂔」「𠂔」にて終はる漢字音なり。

甲は「かる KAP」、莖は「じつ SIT」、皿は「むく MOK」、艶は「あい UIK」なり。下の

假名をつなげて読めば「らつくき」となり、後に述べる「ち」（「吉／きち KIT」など）を加へて、「ふづくちき」と呼ぶ。

「ふづくちき」とはすなはち「入聲」の儀に異なる。

混同を避けんがため、《隨唐音》、《吳音》、《漢音》の定義を述べん。

《隨唐音》とは、漢字の日本に入り來たる頃の唐土にての發音にして、アルファベットを以て表す。《現代中國音》とは相當なる懸隔あり。凡そ、字音（音読み）とは、盡く《隋唐音》を日本語に轉寫したるに外ならず。

《吳音》といふは、當初（五世紀以來）に到來せる漢字の《隋唐音》を轉寫したるものにして、佛教用語の多きこと顯著なり。

《漢音》と稱するは、七世紀を中心にして體系的に入り來たる《隋唐音》を轉寫したるなり。

字音に《吳音》と《漢音》の別あるは、抑々《隋唐音》に《吳音》と《漢音》の別ありしがゆゑなり。たとへば、「直」なる漢字は、《隋唐音の吳音》はDIKなれば、此を「ぢき」と受けて、《字音の吳音》と爲し、《隋唐音の漢音》TIOKを「ちょく」と受けて《字音の漢音》とこそは爲したりけれ。因みに現代北京音にてはzhi。

茲に「母音調和」なる現象を紹介せん。

日本語の屬する「アルタイ語族」には《母音調和》なる特徴ありて、現代日本語にさへ若干の痕跡を残す。後續母音の先行母音に引かるるの現象なり。「心（こころ）」「所（ところ）」「寶（たから）」の如く、o-o-o' a-a-a' と同じ母音の連續するを言ふ。

あるいは、「掌（たな）」を見よ。手の中心部なるに據りて、「手の心」と言ひたれど、古語にて「手」を「た」といふありき。「たのこころ ta-no-kokoro」と言はんと欲すれば、ta の a に引かれて、no の o の a に轉じたるなり。

日本語は子音を單獨にて發音するを得ず。

而して、「學」（隋唐音GAK）の發音を表記するに、日本語に存せざる單獨の k を如何に表記すべしやの壁に牴觸するありき。日本語の母音の中にては u の音、別して弱し（但異論あり）。よりて、k のみにて發音するの難ければ、u を附けて、ku として受け入れたり。

扱て、「吉」は「きつ」《漢音》とも、「きち」《吳音》とも讀むを得。《隨唐音》は、《漢音》も《吳音》もKIT^o。

《吳音》は《漢音》に比して早期に本朝に到來したれば、五・六・七世紀に已に消滅しつつありし《母音調和》の影響を受くること大なり。

かかるがゆゑに、KITを假名にて表記せんに、《漢音》にては弱き母音 u を附して kitu として、「きつ」と表記するに到れども、《吳音》にては母音調和を起し、i を選びて kiti とし、「もち」と表はせり。然者、何故に、「學」は《漢音》のみならず、《吳音》に於ても、「がか（gaka）」に非ずして「がく（gaku）」となりたりや。u は弱き母音なれば、GAK の後の存在せざる母音に代へて入るるに道理ありと

ぞ思はれたるなんん。a は強きに過ぎて、存在せざる母音に代はるを得ざりしなり。

かくて、「吉」の KIT の後には、如何なる母音を入れるかに迷ひたる古人は、母音調和の影響少なき《漢音》の場合は u を入れ、母音調和を起し易き《吳音》の場合には、i を入れて、各々、kitu, kii とはなりたりけれ。

「越」は隋唐音にては《漢音》も《吳音》も UIAT なり。古代日本人は、u は w', ia は e として受け入れたりき。ゆゑに、「越」は wet と聞えたるに由りて、《漢音》は「ゑ」(wetu) となり、《吳音》の場合には母音調和生じて、「ゑち」(weti) へはなりたりけり。

何故に、《吳音》の wete たゞげしで weti になりたりや、と訝り給ふなけれ。e と i は近き音にして、かつ、i は e に比して弱き母音なりしかば、存在せざる母音に代用するには、i の方相應しかればなり。

尤も、《漢音》にても、「虧 GIAK」「積 SIAK」「驛 IAK」の如く、母音調和を起したる例なきにしもあらず。「虧」が geku なひで、geki になりたるを けい より、兩者比較すれば母音調和を起すは《吳音》なるが通例なれど、《漢音》にも生ずるにありといへるのみ。

「ゑづくちき」(入聲) の中の「ゑ」は極めて異様なれば、一言を致さん。

「立」の隋唐音は ripu なり。日本語の「ラリルレロ」に該當する音は現代中國語にては l (エル) なれど、隋唐音にては若干音價に相違ありとて、r を以て表記す。現代中國語にて、r を以て受くる「汝(ru)」「日(ri)」「若(ruo)」「柔(ru)」杯は、隋唐音にては《漢音》z, 《吳音》n の音價を持ちてあり。隋唐音は「汝(漢 ZIO, 吳 NIO)」「日(ZIT, NIT)」「若(ZIAK, NIAK)」「柔(ZIU, NIU)」^o 《字音》(音読み) との類似に驚かれるに相違なし

「立」の現代北京音は li なり。この字の隋唐音 RIP を日本人は「りゅ」として受け入れたり。奈良時代は「リップ ripu」と發音せり。周知の如く、平安以後《ハ行轉呼音》なる現象の生じて、語中の p は f になり w になり、さらにサイレントと化したるによりて、後來「リウ (リュウ)」なる發音に變じたり。「奥の細道」に見ゆる「立石寺」(りつせきじ) は「りゅうしゃくじ」と讀むの習ひあり。

RIP の後に、p, t, k の來たる場合、たゞくば、「夏」を伴ひて、「立夏」となりたる場合は、促音の生ずるあり。破裂音の重なりて、音が「促さる」ふじふべしや。^う宜なるかな、「立夏」の「リフカ」より轉じて「リッカ」となりたる。

「合」も隋唐音は GAP^o 字音は「がる」。「合理」の場合は、「がるり」と書きて「ガウリ」と發音す。されば、p, t, k の後續するや、促音化生じ、「合體」は「がふたい (ガウタイ)」に非ずして、「がつたい」となる。

p に p, t, k なる「(無聲) 破裂音」の後續すれば、促音化生ずるの儀を述べたれど、破裂音なむる s も、相當なる強き發音を有すれば、促音化の生ずる例あり。「甲子」は「甲子園」(甲は KAP) の「かふし」にては「カウシ」なる發音なれど、これを「かつし (カツシ)」と讀むこと尠なからず。

p, t, k は「無聲破裂音」。これに「無聲齒擦音」の s を加ふれば、「入聲の後にて促音化の生ずる」全ての場合を包含して遺漏なしといふべし。p, t, k, s を一括したる場合は如何なる呼稱をか宛つべき。日本語の子音は、sh, ch, ts ^{複雜} 抱複雜なるを除けば、k, g, s, z, t, d, n, h, p, b, m, y, r, w に限りて大過なし。この

中に無聲音（喉の鳴らさぬ發音）は **k, s, t, p** のみ。他の音は有聲音（喉の鳴る發音）。然則、大雜把に申せば、「入聲の後に来て促音化を起す子音」は「無聲音」なりと定義して可ならずや。

聊か愉快なるが「十」。隨唐音は ZIP。自動的に字音は「じゅ」となる。「ふ」が「う」に轉呼するがゆゑに、「ジウ」または「ジュウ」と發音せらる。

然而、「十干」といふときは、「干」は「かん kan」なれば「破裂音 k」の後續するありて、促音化生ず。「じゅ」の「ふ」の促音になりて、當然「じつかん」となるが道理なり。

現代にては、これを「ジツカン」にあらで、「ジュツカン」と發音す。「十萬」の如く、促音の生ぜざるときには、「ジュウ」となつて拗音を生ず。そのため、そもそも「十」の音に拗音ありやの如くに誤解せられ、「ジュツカン」なる音とこそは化したりけれ。

もし、「十干」の「ジュツカン」なるが道理ならば、「立體」も「リツタイ」ならで、「リユツタイ」なるにあらずや。論理的整合性を保たん爲には、爲し得る限り元來の表記を残すべきなり。すなはち、「ジュツカン」と發音すとも、「じつかん」と書くが正統なり。「りつたい」を「リツタイ」と読み、一方、「じつかん」を「ジュツカン」と讀むは整合性なきが如くに思はるべけれど、歴史的假名遣の原理は妄りに假名遣を継ぐなれとの由なり。

さらに、「入」は《漢音》ジフ ZIP、《吳音》ニフ NIP にて、じゆだい入内、じつかん入魂、につしふ入集（歌の敕撰和歌集に採擇せらるるの謂ひ）など格別なる読みあり。また、「平上去入」の「入聲」も「にふせい」（にゆうせい）」にあらずして、「にしじやう」なり。

さる知人にこの理を説きたるに、「馬鹿馬鹿しい。『にゆうせい』と讀めばいいぢやありませんか」と反論せらる。

やんねるかな
已哉。

英語の psychology (心理學) は「サイコロジ」と發音するに、「馬鹿馬鹿しい。ブシチヨロギと讀めばいいぢやありませんか」といふに等しからん。「英語の場合は、然るべき意味と傳統あれば、サイコロジと讀むべし。日本語にはかかる大層なるものを認むるの要なし」との強辯こほへんにあらずんばあらず。敗戦以來の西歐への劣等感の爲せる業わざと言はざるべけんや。